



横浜橋通商店街 (横浜市)

皆が集まる いきな商店街

■商店街を起点とした地域の活性化

戦前から地域に密着した商店街として人々の生活を支えてきた横浜橋通商店街。客足に伸び悩む商店街も多い中、横浜橋通商店街は活況を呈しており、今では数多くのメディアが取り上げ、海外からも視察がやってくるほど。特に魅力的なのが豊富な「食」。中でも、アーケードの下でお酒を飲みながら商店街の味を楽しめるビアガーデン

「大人の縁日」は多くの人で賑わいます。盛り上げの中心となっているのは、横浜橋通商店街協同組合理事長の高橋 一成さん。この地域で代々様々な商売を営んできた家系の4代目ですが、商店街の活動に関わり始めたのは約10年前。近年商店街活動の担い手も不足しており、「手伝ってほしい」と声をかけられたのがきっかけだそうです。

■地域の枠にとらわれない

高橋さんは、薬局を経営する傍ら、様々な工夫を凝らして商店街の活性化のために取り組んでいます。アイデアは商店街の枠にとどまりません。例えば、横浜観光コンベンション・ビューローと連携し、他県の修学旅行生を商店街に招き、自分たちの地元の特産品を販売してもらう接客体験の取組みをしています。特徴は、商店街の共同スペースを活用して独立した店舗を構え



ること。修学旅行生にとっては、店舗経営体験と自分たちの地元の魅力発見につながり、横浜橋通商店街にとっても、ほかの商店街にはない珍しい商品でお客様を呼び込めるというメリットがあります。

また、商店街付近の小学校では外国籍の児童が全体の半数を超えています。国の数でいえば10カ国以上。地域で国際化が進んでいる状況を、高橋さんは「課題」ではなく「チャンス」ととらえます。そこで今後外国籍の児童のお母さんたちの協力を仰ぎ、商店街で中国、韓国、

一言アドバイス
失敗しても反省すればいいんです。

横浜橋通商店街
協同組合
理事長 高橋 一成さん

成功のコツ

- ・地域の外から人を呼び込むことで活性化
- ・自分に近い人だけでチームを作らないこと
- ・何でもやってみること
- ・常に何かできることはないか思考を巡らせること

フィリピン、タイ、ネパール、ロシアなど様々な国の料理が一度に楽しめる「ワールドフードフェスタ」をやりたいとのこと。国際化は商店街の新しい「色」になります。「ここにすれば多国籍のものが揃っている」と思ってもらえれば、人が来てくれるというわけです。

■大切なのは何でもやってみること

高橋さんをはじめは商店街の皆さんの意見をまとめるのに苦労したそうです。だからといって自分に近い人だけでチームを作ることはせず、様々な意見に

耳を傾けるように心がけました。「最も大切なのは何でもやってみること。そして常に何かできることはないか思考を巡らせること」と話す高橋さん。だからメディアの取材も断ったことがないそうです。「失敗しても反省すればよい」その精神で今日も進み続けています。





平塚まちなか活性化隊(平塚市)

10年先を見据えて描く未来

■業種・世代の枠を超えた商店街活性化に向けた取り組み

平塚まちなか活性化隊は、駅前商店街の活性化を目的として2018年10月に発足した団体です。平塚市が声をかけたことをきっかけに、商店街の店主や、商工会議所員、市役所職員、ボランティア、大学生など、業種・世代の枠を超えたメンバーが、活動しやすいフラットな組織で商店街のブランディングやにぎわいづくりに取り組んでいます。

■10年先を見据えた活動

活動の特徴は、先を見据えることと、持続可能な形で取り組むこと。まず、2019年にまずは5年間のまちづくりの目標、戦略、活動を掲げたロードマップを作成しました。ロードマップに記された活動をメンバー全員で役割分担することで、それぞれが責任を持ち自発的に携わっています。

■持続可能な拠点づくり

もう一つ持続可能な取り組みについて、メンバーの能勢 康孝さんは、「このような活動で重要なのは、補助金だけに頼らない仕組みを考えておくことです」と話します。これまでも様々な活動に携わってきた能勢さんは、補助金がなくなった途端に活動が立ち行かなくなる事例を見てきたそうです。

そこで、みんなで相談して、持続可能な活動拠点として「ま



予想図

ちなかベース きちきち」を設置しました。

商店街の空き店舗を利用した活動拠点で、ちょっとした休憩場所としての利用から、会議やママ会などのイベント、キッチン機能を活用した1日店舗まで、幅広い活動が行われています。

■商店街に人の集まる場所を提供

安定的な収益確保が大きな課題ですが、「まずは利用者を増やすことで使用料収入をあげ、

一言アドバイス

補助金だけに頼らない
仕組みづくりが重要。

平塚まちなか活性化隊
代表 能勢 康孝さん

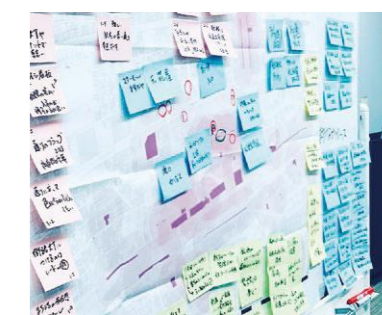
成功のコツ

- ・将来の夢を描いたロードマップからバックキャストした活動
- ・様々な職種や世代の枠を超えたメンバーが集まることで多角的な企画が生まれ、活動の幅が広がる
- ・メンバー全員で役割分担することで主体的に行動するようになり、活動が活発化

継続的に取り組むことができるサイクルを築いていく。そして『できてよかった』という声が出るようになれば」と話す能勢さん。今後、企業とのタイアップにも挑戦していきたいそうです。

「きちきち」以外にも、商店街のお祭りなどで家族や仲間が座ってつろげる芝生のスペースを提供し、100名近くの方が集まるなど、商店街に人の集まる場所をつくっていく平塚まちなか活性化隊。「まちなかベース きちきち」を核にして商店街にたくさんのコミュニティが生まれ住民の方のくらしをさら

に豊かに充実したものにするため、これからも様々な取組みを進めていきます。





NPO法人湯河原げんき隊 (湯河原町)

年10回のイベント開催で湯河原の「げんき」

■地域資源を活用したコミュニティづくり

湯河原げんき隊は、地元湯河原の汲みたて温泉や地元産のタケノコやイモなどの地域資源を活かして人のつながりをつくるNPO法人です。年末年始の餅つき大会、いちご狩り、タケノコを食べる会等、年10回ものイベントを開催しているほか、地域の様々なイベントに助っ人として呼び出されています。

■10年やれば平凡も非凡になる

仕事を退職して湯河原に戻り、温泉関係の仕事を継いだ、湯河原げんき隊の神谷 一博理事長。2010年に湯河原げんき隊を立ち上げたきっかけは、町の観光戦略会議に2年間参加し観光客の減少と住民の高齢化が進む現実に直面し、町に活気を取り戻したいとの想いから。「大切なのは、続けることです。何事も10年やれば平凡も非凡になるといいます。当初のイベン

ト参加者は主に知り合いで30人程でしたが、10年やってきて今では初めての方も多く、100人以上になることもあります」と神谷理事長は話します。


■日々の活動の積み重ねが自然と仲間を生む

湯河原げんき隊の特徴は、自分たち主催のイベントだけではなく、地域全体を盛り上げたいと、地域の行事での足湯の設置、国際交流のホストファミリー役の引き受けなど、様々な活動に



一言アドバイス

何事も10年やれば平凡も非凡になるといいます。取組みは継続することが大切です。



NPO法人湯河原げんき隊
理事長 神谷 一博さん

成功のコツ

- ・10年間取組みを継続する強い意志
- ・継続するために必要なコスト意識の仕組みづくり
- ・他団体主催のイベントのお手伝いなど信頼を生む活動の積み重ね

を創出

積極的に参加していることです。ただし、このような取組みを継続するためには、人員も含めたコスト意識が重要です。このバランス感覚に裏付けされた日々の活動の積み重ねから信頼が生まれ、自然と仲間が増えてきたそうです。最近始めた告知用のグループLINE@の参加者は、げんき隊が直接参加をお願いしなくても、人が人を呼び、瞬間に50人超えに。300人くらいまではすぐに増えるので

はないかとのこと。

また、「喜んでもらうためにはどうすればいいのか」と、常に新しい企画に挑戦していることも特徴の一つです。例えば、2019年末に始めた「餅つき大会」はご自身が過去に参加したイベントで大人気だった企画を導入したもの。参加者から大好評で、またやって欲しいという声が多く寄せられ、翌月の1月には早速第2弾を開催しました。

■志を同じくする仲間を助けたい

「これからは、同じような活動をしている人、苦労している人、例えば折角良いアイデアを

持っているのに、集客や資金の関係で困っている人が多くいます。今、金銭面でも補助してあげられるような仕組みの構想を持っていて、向こう数年で形にしたいと思っています」と話す神谷理事長。

NPO法人湯河原げんき隊は、これからも地域に人のつながりをつくり続けていきます。

